

親族による高齢者虐待

08年度12.2%増

前年度比

65歳以上の高齢者への親族による虐待の相談や通報を受け、自治体が加害の事実を確認した事例が2008年度は1万4889件に上り、前年度より12.2%増えたことが、厚生労働省の調査で3日までに分かった。被害に遭ったお年寄りの45.1%が介護が必要な認知症で、加害者の約4割が息子だった。

介護施設などで職員から虐待を受けた事例も12.9%増の70件。介護をめぐる親族からの虐待による死者は24人(07年度は27人)。高齢者虐待の厳しい現実があらためて浮き彫りになった。

件数が増えた理由について厚労省は「自治体への通知、相談に対する意識が浸透した結果」とした上で、「認知症を患った高齢者の行動や言動へのいら立ちや、介護疲れなども背景にあるのではないか」との見方を示している。

調査は、高齢者虐待防止法に基づき06年度から行っており、今回で3回目。全国1800の市町村と47都道府県を対象に実施した。

死者24人 加害者40%息子

高齢者虐待に関する調査結果

		2006年度	07	08
親族による虐待	相談・通報件数	18,390	19,971	21,692
	虐待判断件数	12,569	13,273	14,889
介護施設などで職員が虐待	相談・通報件数	273	379	451
	虐待判断件数	54	62	70
死者数		32	27	24

(厚生労働省調べ)

調査結果によると、親族による虐待に関する自治体への相談・通報は前年度比8.6%増の2万1692件。1件の通報で複数の高齢者に対する虐待が判明した事例もあり、確認された被害者数1万5293人上り25.7%。加害者の40.2%が息子で、次いで夫17.1%、娘15.1%、嫁8.3%などとなっている。特別養護老人ホームや老人保健施設などの施設での虐待に関する相談・通報は451件(07年度は379件)。虐待していたのは介護職員が89.5%で、身体的虐待が74.3%に上った。

介護疲れなど背景か

亡くなった24人のうち死亡原因は殺人が10人。5人は介護の放棄、心中と虐待行為による致死が2人ずつ、それ以外が5人だった。